

日本作業療法士協会 海外研修助成制度

実績報告書

学会名：WFOT Congress 2026

演題名：Impact of Meaningful Activity Loss on Frailty Among Community-Dwelling Older Adults: A Cross-Sectional Study

会期：2026年2月9日～12日

開催地：バンコク、タイ

申請者

氏名：小渕 浩平

所属：JA 長野厚生連長野松代総合病院リハビリテーション部

会員番号：48447

所属士会：長野県

1. 発表演題の概要

【研究の背景】世界で最も高齢化が進む日本において、要介護状態の前段階である「フレイル」の予防は、喫緊の公衆衛生上の課題である。これまでの研究では、身体的機能や栄養状態がフレイルの主要な要因として注目されてきたが、近年、作業療法（OT）の視点からは、個人にとって「意味のある作業（Meaningful Activity: MA）」への従事が、健康的な加齢を支える重要な因子である可能性が示唆されている。しかし、日本の農村部という特定の地域特性において、MAの有無やその質（遂行度・満足度）が、フレイルおよびプレフレイルの状態とどのように定量的に関連しているかについては、大規模な調査に基づく検証が不足していた。

【目的】本研究の目的は、日本の農村部に居住する高齢者を対象に、意味のある作業とフレイル（およびプレフレイル）状態との関連を横断的に明らかにすることである。

【方法】農村部の地域在住高齢者1,018名（65歳以上）を対象に、横断的調査を実施した。意味のある作業の評価には、対象者が自身にとって価値のある作業を選択し、その遂行度と満足度を評価する手法を用いた。フレイルの判定には「基本チェックリスト（Kihon Checklist）」を使用し、対象者を「ロバスト（頑健）」「プレフレイル」「フレイル」の3群に分類した。統計解析には、人口統計学的変数および健康関連変数を調整した多項ロジスティック回帰分析を用い、MAの有無、遂行度、満足度がフレイル状態に与える影響を検討した。

【結果】解析の結果、全体として「意味のある作業」を有していることは、プレフレイルおよびフレイルの両状態に対して、有意に低いオッズ比と関連していた。また、MAの遂行度が高いこと、およびMAに対する満足度が高いことも、フレイルに関連する負のアウトカム

のリスク低下と統計学的に有意に関連していることが示された。

【考察と結論】本研究の結果は、農村部の高齢者において、意味のある作業への従事がフレイル予防に寄与する強力な因子であることを示唆している。特に、単に作業を行うだけでなく、その作業の質（遂行の質や満足感）を高めることが重要である。この知見は、作業療法士が個々の対象者の価値観に基づいた MA を特定し、その従事を支援する「作業に基づいた介入 (Occupation-based Intervention)」が、地域におけるフレイル予防戦略として有効であることを裏付けるものである。

2. 学会参加と発表の印象

【学会全体の規模と熱気】2026年2月、タイで開催された WFOT Congress 2026（世界作業療法士連盟大会）に参加した。本大会は、世界100カ国以上から数千人の作業療法士（OT）が一堂に会し、演題数は3,000件を超えるという、文字通り世界最大規模の学術会議であった。会場となったバンコクの国際会議場は、多様な言語と情熱に満ち溢れ、作業療法という共通の専門性を持つプロフェッショナルたちが、国境を越えて知を共有する姿に、開始直後から圧倒された。

【国際的な議論の潮流：社会モデルへの転換】最も印象的だったのは、発表されるテーマの多様性と「社会モデル」への強い関心である。日本の作業療法学会では、脳血管障害や整形外科疾患といった医学的なモデルに基づく機能回復の報告が多い傾向にある。しかし、WFOTでは疾患や医学的診断はあくまでクライアントの背景の一つとして扱われ、むしろ「作業的公正 (Occupational Justice)」「社会への包摂」「気候変動と生活」といった、地域や社会との接続を重視する社会モデルが一般的であった。OTが個人の機能訓練に留まらず、社会の構造や環境に働きかけ、誰もが自分らしい作業に従事できる権利を守る存在であることを再認識し、OTの学問としての深みに改めて感銘を受けた。

【ポスター発表と「Top 100」選出の経験】私自身は、日本の農村部におけるフレイルと意味のある作業の関連についてポスター発表を行った。非常に光栄なことに、膨大な演題の中から「Top 100 Posters」の一つに選出され、特設エリアに展示されるという貴重な機会を得た。ブレイクタイムでは、拙い英語ではあったが、国際的なOTたちと直接議論を交わすことができた。特にアジア圏のOTからは、「農村部特有の社会的資源をどう活用しているのか」「文化的なMAの差をどう考慮しているのか」といった鋭い質問を受けた。日本の地方で行っている地道な研究が、国際的な文脈でも価値があることを認められ、自分が進んでいる方向や取り組んでいる研究が的外れではないと確信できたことは、今後の大きな自信となった。

【人的交流による刺激】また、本大会では多くの刺激的な出会いがあった。特に、オーストラリアで作業療法士として第一線で活躍している日本の友人の口述発表を聴講し、その

専門性の高さとプレゼンテーションの力強さに深い感銘を受けた。また、日本から参加された指導的な立場の先生方や、同世代の意欲的な同僚たちとも、現地の熱気の中で将来の作業療法のあり方について夜遅くまで語り合う機会を得た。こうしたネットワークは、今後の臨床や研究を継続していく上での大きな財産になると確信している。

【今後の展望と決意】 今回の学会参加を通じて、より広い視野で作業療法を捉える必要性を痛感した。今後は、疾患だけでなく「社会の中でのその人」を見据え、地域や社会に貢献できる作業療法士として実践を積み重ねていきたい。WFOT で得た「世界基準の視点」を日々の業務に還元し、日本における社会モデルの実践をさらに推進し、その成果を再び国際的な場で共有することを目指していく。今回の貴重な機会を与えてくださった関係各位に深く感謝したい。

3. 文献

4. 論文掲載情報（学術雑誌に投稿し、論文掲載された場合に記載）

掲載誌： Occupational Therapy In Health Care (Published:2025)

論文タイトル： Association Between Meaningful Activities and Frailty in Community-Dwelling Older Adults in Rural Japan: A Cross-Sectional Study